現地の先生のよきパートナーになりたい

国際交流基金ベトナム日本文化交流センター
藤村 春菜

私は、ハノイの国際交流基金ベトナム日本文化交流センター（以下、JFVN）に日本語指導助手（以下、指導助手）として派遣されています。ハノイは古くからの歴史を感じられる一方で、変化が目まぐるしい活気に満ちた街でもあります。私はこの街に 2023 年 5 月に赴任し、約 1 年が経ちました。

ハノイの JFVN には日本語上級専門家・日本語専門家（以下、「専門家」と総称）が 6 名派遣されていて、日々多くの専門家からサポートを受けています。私は主に中等教育支援を担当していますが、そのほかに、JFVN の日本語講座で授業をしたり、初中等教育用の日本語教科書作成を手伝ったりする機会もあります。

中等教育支援の内容は、中学校・高校で日本語を教えている先生向けの研修や勉強会の実施、授業巡回などですが、ハノイの指導助手はハノイ、ハイフォン、バクザン省、ゲアン省という北部地域を担当しています。今回は、この北部の中等教育支援について紹介します。

300km 離れた学校へ

授業巡回は学校数の多いハノイ、ハイフォンを中心に行っていますが、2023 年度末にはハノイから約 300 ㎞離れたゲアン省の高校を、専門家と JFVN のベトナム人講師（以下、現地講師）と共に訪問しました。

「～へ行ったことがあります」の練習

この高校は省内で唯一日本語教育を行っている中等教育機関で（2024 年 3 月時点）、1 人の先生が高校 1 年生から 3 年生に教えています。頻繁に支援に行ける地域ではないので、全学年のクラスを見学させてもらい、先生と協力して日本文化の紹介（福笑い、書道）も行いました。

どのクラスでも真剣に学ぶ生徒の姿が見られ、休み時間には「私の家は学校から遠いので、学校の寮に住んでいます。日本語の勉強は楽しいです。」と積極的に話してくれる生徒もいました。そんな生徒たちから、私もパワーをもらいました。

授業見学のあとで、先生にフィードバックをしたり、困っていることを尋ねたりしますが、生の授業を見ることは私にとって非常に勉強になります。例えば、このゲアンの先生は、既存の中等教育用の教科書には聴解が不足していると考え、『いろどり』*1 の聴解を部分的に使用していました。こうした生徒に合わせた先生ならではの工夫を見られるのは、貴重な機会です。いい方法だなと思ったことは、別の学校に見学に行った際に、ほかの先生にも共有するようにしています。

このように、日頃から先生一人一人と連絡を取って、学校を訪問して生徒とも交流することで、だんだんとベトナムの中等教育の様子がつかめてきました。そして、何よりも「現場に足を運んで、見てみる」ということが、自身にとっても学びになり、先生との関係性を深めるうえでも大切だなと感じています。

先生とのつながり、先生同士のつながり

教師対象の「勉強会」も行っています。これは研修よりも小規模で、専門家と現地講師と協力して、年に数回実施しています。2023 年度は、ハノイとハイフォンで対面で実施しました。参加人数は最小 2 名、最大 10 名程度で、各回 3 時間で行いました。

2023 年度の最後の勉強会は「ことばを『使う』活動って何？」というテーマでした。これは、既存の中等教育用の教科書には、学んだ文型・語彙をリアルな場面で使用する活動が乏しいため、先生自身で教科書の練習をアレンジしてみよう、というものです。まず活動を体験したあとで、グループになって、授業で行うことを想定してモデル会話や、生徒が活動で使用するタスクシート等の案を考えました。「これだと生徒に指示が伝わらないと思う」などとお互いに活動案に意見を出し合っている姿は、さすが現場で教えている先生だなと思いました。

JFVN の教室で行った勉強会

北部の中等教育日本語教師数は 100 名を超えているため（2024 年 3 月時点）、勉強会に参加する先生の数は少ないようにも思えます。人数が少ないことは課題でもあるのですが、意欲的な先生

が集まって、生徒のことを考えながら話し合う機会が提供できたことは、意味のあることだと思います。実際に、2023 年度に行ったすべての勉強会（全 4 回）に参加してくれた先生もいて、小規模な集まりだからこそ、先生と私自身の距離、そしていちばんは先生同士の距離が縮まりやすいのが魅力だなと感じています。

1 年目を振り返って

赴任したての頃は、生徒や教科書のことをよく知っているのは現場の先生なので、指導助手として私に何ができるだろうかと心配な気持ちもありました。ですが、業務を行う中で先生方との信頼関係も生まれ、また「この練習問題の答えはどうして A ですか」といった細かい相談も受けるようになり、私は先生と同じ目線に立って物事を一緒に考えられるパートナーになりたい、という目標が生まれました。

北部の教師数は多いので、先生の声を聞きながら、どのように支援を行き渡らせるかが課題です。残りの任期 1 年の中で、引き続き専門家からの指導を受けながら、現地講師とも協力をして、業務にあたりたいと思います。

注 1：国際交流基金「いろどり：生活の日本語」： https://www.irodori.jpf.go.jp/ （最終閲覧日：2024 年 5 月 14 日）.

以上